

多様な主体が参画する新たな里づくりへ—里地里山コーディネーターの育成を—

山形県内陸北部、角川の里にもようやく秋の涼しさが到来した。今年は例年にない猛暑だったと同時に好天に恵まれたということもあり米のできばえは上々だ。収穫に忙しい季節である。

周囲を豊かな里山に囲まれ、人々が暮らす角川の里は川と棚田、段々畑によって構成されている。長年里に住む人々がきめこまやかに手を加えることによってつくられた、豊かな恵みをもたらす里ならではの景観を形成している。

角川の里では、こうした豊かな里地里山環境とそこに住む人の知恵と技術を活用することで実にさまざまな地域作りを行ってきた。それは里地里山の保全伝承はもちろん、新たな産品開発、都市住民を中心とする外部の人々への体験観光や子どもたちへの教育旅行の提供、そして他の里地里山地域との交流と学習を促進してきた。今ではこうした角川の里の活動に年間 1,000 人をこえる人々が 1泊2日や 2泊3日といった農家ホームステイを行いながら訪れるようになっている。

活動の特徴は、なんと言ってもそこに住む住民が主体であるということだ。だが一方で里の住民の多様な営みを真の力として引き出すには、住民だけでなくより多くの主体との連携協力が必要不可欠だ。昨今のさまざまな活動を見ていると農林分野や教育分野をはじめ多くの分野で行政や企業や民間団体等との連携が重要視されている。また、当該地域の住民と外部の住民との連携のあり方も注目されている。過疎少子化が進む里地里山地域にあって、地域維持のためにも住民だけでは補えない部分に対する新たな協働が求められているからであろう。しかしこうした求めは必ずしもそうしたマイナス面だけが動機となっているわけではない。近年、都市社会の問題が浮き彫りになる中で、もう一度里地里山を見直し価値を再発見しながら、新たな形で回帰していこうとするよりポジティブな志向性も強く働いているのだ。

こうした現状を考えると今後の里地里山地域は、行政、企業、民間団体、学術研究機関など多くの主体や、都市部や他の里地里山地域なども視野に入れたより広域的なエリアを見据えた連携の形がますます重要となってくることだろう。ここから見えてくるのは、里の住民と他の主体や地域とをつなぐコーディネーターやファシリテーター、そして地域全体を見据えながら里の地域作りのデザインを行うプランナーの需要が高まっているということだろう。

こうした社会的ニーズに対応して、筆者をプロジェクト担当に加えた山形大学では、今年度 11 月より 3 年間の計画で、角川里の自然環境学校と連携して「里地里山活動プランナー養成講座」が開講することになった。地域資源を活用した現地体験型教育を展開する山大「エリアキャンパスもがみ」を基盤にしつつ、角川里の自然環境学校との連携により、体験重視のプログラムで実践的にプランナーの養成を行うというものだ。里地里山の自然環境や社会構造についての研究成果を踏まえながら、里の住民による実習や、中間支援組

織の役割をも果たす角川里の自然環境学校による地域ワークショップを手法とする地域計画作りのテクニックを実際的に学ぶことができる内容になっている。

今年度から始まる当講座はまだまだその成果は未知数だ。だがこの講座が、地域と大学の密接な連携のもとで行われるということ、それまで学内で細分化されていた分野が連携して、最新の状況に対応することを目指して行われるということ自体に新たな風と大きな可能性を感じさせるものがある。この交流と学習の新たな風から多くの優秀な里地里山活動プランナーが生まれ活躍していくことを期待している。